

氏 名 かん だ おう りゅう らん
神 田 (王) 柳 蘭
学位(専攻分野) 博 士 (人間・環境学)
学位記番号 論 人 博 第 21 号
学位授与の日付 平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目 「難民」から「華」人への道
一戦乱と越境に生きる北タイ雲南人の民族誌

論文調査委員 (主 査)
教 授 福 井 勝 義 教 授 山 田 孝 子 教 授 田 中 雅 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、タイ北部の国境地帯に住む中国系移民である「雲南人」を対象に、移住にともなう歴史経験と「華」人エスニシティの生成について、雲南系漢人と雲南系回民(ムスリム)の口承史、タイ国家ならびに中国や台湾など中華世界との社会関係の形成という側面から実証的に考察した文化人類学的研究である。

序章にあたる第1章では、従来の華人研究とエスニシティに関する先行研究を検討したうえで、タイ北部における「雲南人」の“われわれ”集団の生成を、移住経験にもとづく他者関係の再編と、タイ国内ならびに国境を越えた多面的なネットワークから捉えるという点を提唱した。

タイに住む中国系移民については、これまで海路華人移住者(Overseas Chinese)を対象にした研究が蓄積されてきたが、陸路華人移住者(Overland Chinese)に関する研究はほとんど行われてこなかった。また、従来の移住研究は、プッシュ・プル理論を軸にして、移住現象を移住元と移住先という二極における社会的、経済的、文化的な変化に関心を示してきた。こうした二極論に依拠した移住研究では、個人レベルにおける移住経験の諸相をほぼ等閑視しがちであった。そのため、移住過程における歴史経験が移民に与える社会的影響、すなわち、アイデンティティの形成や彼らの定住先における社会関係の構築にどのような質的变化を与えたのかについて、あまり注意が払われてこなかった。そこで第1章では、北タイの雲南人の移住事例を通して、移民社会を移民自身の移住経験の諸過程から捉えなおし、移民間ならびに移民と他者との動態的な社会関係の展開とその歴史の変遷から、“われわれ”集団の形成を検討していくことを提示した。

第2章では、タイにおける雲南人集落が、19世紀末から20世紀後半までにかけて、異なる移住背景をもつ移民によって段階的に形成されてきたことを、聞きとり調査とタイ語・英語と中国語の一次資料を用いながら通時的に記述した。現在、北タイ国境には約70箇所以上の雲南人集落があると推定される。これらの集落の多くは、「難民村」と中国語で呼ばれている。しかし、こうした雲南人の集落は、中国、ビルマやタイをはじめとする複数の国家間、ならびに国内の政治的、経済的な諸要因が歴史的に絡みあって成立してきた。とりわけ、20世紀の半ばに生じた中華人民共和国の成立前後に生じた中国の内戦と、それにともなう中国国民党軍のタイへの定着が、今日の雲南人社会の形成に大きな質的な変化を与えた点を指摘した。

第3章と第4章では、前章の雲南人集落の形成過程をふまえながら、移住者個人に焦点をさだめて、雲南系漢人と雲南系回民の口承史を記述し、ミクロな視点から、彼らの移住とタイへの定着過程からみた集団の生成過程を描きだした。

雲南系漢人と雲南系回民の両者は、移住史をともに共有する部分がある一方、移住過程における歴史的経験に違いがある。両者を比較した場合、雲南系回民の特徴のひとつに、彼らには移住前に交易活動に従事していた商人が多く含まれる点がある。そのため、彼らは漢人主体の国民党軍の移住とは異なる経験をもち、タイへの定着過程にも異なる諸相がみられる。19世紀末から20世紀前半までの移住者は、主に雲南系回民の商人たちより構成され、集落も小規模ながらチェンマイなどの盆地に交易中継地として形成されていたにすぎなかった。しかし、20世紀後半になると、中国とビルマの政治的、軍事的、経済的諸事情の変化により新たな移民が急増する。とくにこの時期に、中国からの元国民党軍出身の雲南系漢人がタイに定着した。その結果、雲南人社会では圧倒的多数の漢人とマイノリティの回民という構図ができあがり、その後の雲南人

移民社会内部の社会関係の形成に大きな影響を与えたことを指摘した。

第5章では、タイ国家の中に包摂されていく雲南人の移民としての姿を、法的枠組みの中から捉えなおし、彼らが国民国家のなかでどのように管理され、あるいは排除されてきたのか、タイ政府の雲南人に対する否定的なまなざしを浮き彫りにした。その一方で、従来、難民として法的に規定され、社会の下層部に位置していた雲南人が、しだいに難民から国民となっていく様子を国籍取得の点からみた。また、この章では、漢人と回民がタイへの定着化を進めていく過程で、両グループがしだいに分化していく過程を示した。具体的にはモスクをはじめとした宗教施設の建築などから、回民の視点にたつて、「難民村」からの再移住とムスリム・ネットワークによるコミュニティの形成過程を明らかにした。

第6章では、漢人と回民を含む雲南人内部に、移住経験の違いによって、帰属意識が二分していくことを指摘し、中国と台湾に対する社会関係の形成にもそれぞれ違いがみられることを示した。今日における雲南人は、タイ国内における移民間のネットワーク形成のみならず、中国や台湾との文化的、経済的、政治的なネットワークを展開しはじめている。この際、主として国民党軍出身の漢人は台湾との結びつきを強化し、他方、民間人としての移住者が多い回民は中国との関係構築に熱心である。雲南人は漢人であれ回民であれ、タイにおいていかなる「華」人として生きていくのか、タイ、中国、台湾という国家間の政治的、経済的な因子に影響を受けながら、摸索と葛藤の中にあることを指摘した。

従来の華人研究は、「華人＝漢人」という図式が前提となり、「華」人社会の集団生成の過程については、非漢人を含めた民族間関係から論じられることは少なかった。本論は、個人の移住経験の諸相をふまえた集団内部の多面的な社会関係を歴史的に再構築し、さらに国境を越えた人々のネットワークをふまえ、「華」人社会の形成過程を、マクロな政治的、経済的、文化的諸要因と同時に、ミクロな移民による定着戦略の双方向から動態的に描きだした。

論文審査の結果の要旨

本論文の学術上の貢献は、これまで実証的な調査がなされてこなかった東南アジア大陸部への陸路華人移住者(Overland Chinese)に関して、長期間のフィールドワークにもとづいて移民の口承史を丹念に収集し、彼らのタイへの定着過程と「華」人エスニシティの生成を民族間関係から歴史的かつ動態的に描きだした点にある。以下、その審査結果を大きく三つの点から指摘する。

第一に、本論文は、陸路華人移住者の一派である雲南人を対象にし、19世紀末から20世紀末にかけての移住史を、中国語・タイ語・英語の一次資料と移民諸個人からの聞きとり調査から歴史的に再構成している点に特色がある。申請者は、これまで学術的には空白であったタイ／ビルマ国境地帯に分布する雲南人集落について、30箇所以上にのぼる集落に関して聞きとり調査を行う一方、現地を訪れその実態を把握しようと努めてきた。とりわけ、歴史的な段階をふまえて、諸集落の形成過程を記述していったことは注目される。また、27例もの北タイの雲南人の移住事例を、雲南系漢人と雲南系回民を含めて、丹念な聞きとり調査にもとづき記述・分析することを通して、移民社会を移民自身の移住経験の諸過程から描き出した。

こうした聞きとり調査から収集された陸路華人の移住に関する一次資料は、学術的にはきわめて大きな意義をもつものである。陸路華人は、タイ語では「ホー」とよばれてきた経緯をもち、歴史的には中国と東南アジアの政治的、経済的、文化的な諸関係を理解する上で重要な役割を果たしてきた、といわれる。しかしながら、その全体像を含めた集団の実態はこれまでほとんど明らかにされてこなかった。本論文で示された雲南人の移住事例は、19世紀末から20世紀末にかけて、中国と東南アジアの歴史的なつながりを、海路華人(Overseas Chinese)ではなく、陸路華人の実態から新たに捉えなおした点で極めて貴重である。第二に、本論文は、移民間ならびに移民と他者との動態的な社会関係とその歴史的な展開をふまえて、移民集団としての“われわれ”意識が生成されていく点を、移動民の視点から指摘している。これまでの移民研究は、移住元と移住先という二極論に終始しがちであった。その際、移民は、地域間経済を媒介する人びと、あるいは国家の制度から排除される人びととして理解されがちであった。

漢人と回民という2つのサブ・グループの社会関係は、中国、ビルマを経てタイへ定着する過程でどのように変化してきたのか。本論文では、そのことを“われわれ”意識の生成という視点から描きだしている点に独自性がみいだされる。すなわち、漢人と回民がそれぞれ異なる歴史的な背景をもちながらタイへ定着していく過程のなかで、さまざまな政治的、社会的、文化的な利害関係を求めながら、両グループがしだいに分化していく過程を描き出している。

こうした民族間関係からみた移民社会へのアプローチは、漢人を中心にした「華」人社会への理解に対する批判にとどまらず、「華」人社会を移住の諸過程を含めた多様な他者関係力から捉えていく新しい視点を提供するものとして高く評価される。本論文では、これまであまり重視されることのなかった移住過程の経験に着目し、移住過程の経験が定着後の社会関係にどのような影響を与えてきたのかについて、綿密な分析を行っている。

第三に、本論文は移民社会の生成過程を、移民個人を主体にしたミクロな社会関係を、中国、タイ、ビルマ、台湾といった複数の国家間のマクロな政治的、経済的、社会的な諸要因から動態的かつ包括的に捉えている点に特色がある。なかでも特筆すべきは、雲南人移民社会が、移住過程の違いにより、中国と台湾という中華世界との関係性をそれぞれの立場で構築していく経緯を具体的に指摘している点である。ここで注目されるのは、こうしたトランスナショナルな中華世界とのネットワーク形成は、雲南人が移住過程において共有したナショナリズム意識に由来している点である。本論文では、移民社会の特質を集団内部の社会構造に還元するのではなく、移民と母村、さらに移民と再移住先との国境を越えたネットワークをもとに捉えなおしている。このように本論文は、「華」人社会の生成を、タイというローカルなコンテキストと、マクロな国家間関係を射程に入れていることで、現代の移民社会の特徴を如実に描き出している。

以上のように、本論文は、タイ北部の雲南人の移住に関する口承史を丹念に記述していくとともに、英語、タイ語、中国語の一次資料をふまえて、陸路華人の移住についてミクロとマクロなレベルから実証的に浮き彫りにした点で、野心的かつ独創的な内容に富んだものであり、本研究科共生文明学専攻文化・地域環境論講座にふさわしい内容を備えた研究成果として判断される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成17年11月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。